

コンニャク的一种 アモルフォ ファルス・デカス-シルヴァエ の国内初開花について

堀川大輔・高井敦雄・荒木大蔵

コンニャク的一种 アモルフォファルス・デカス-シルヴァエ (*Amorphophallus decus-silvae* Backer & Alderw.) が開花したので、その状況について記録する。

当初、世界で最も背の高い花(花序)を咲かせるコンニャク的一种、アモルフォファルス・ギガス (*A. gigas*) として熱帯植物を輸入販売する業者から2017年3月に3株導入したが、後述のとおりアモルフォファルス・ギガスではなく、同じ仲間のアモルフォファルス・デカス-シルヴァエ (*A. decus-silvae*) と判明した。

導入時は3号ポットに植えられた状態で、開花までに3回鉢増しを行った。3回目の鉢増しは、2020年5月に行い、直径96 cmの鉢に重量6.5 kgの球茎を植え付けた。鉢増ししておよそ8か月後の2021年1月に地上部に芽が現れた。

はじめは葉芽だと思っていたが、3月1日に形状が葉芽とは異なることに気づき、花芽であることが判明した。この時の地上部の高さ(全高)は約105 cm、仏炎苞の長さは約47.5 cm、太さは最も太い所で約7.5 cmだった(写真1)。



写真1 花芽(3月1日)

(全高約105 cm、仏炎苞約47.5 cm)

その後、地上部は1日におよそ10 cmずつ全高が伸び、そのうち仏炎苞の長さは、1日におよそ1~2 cmずつ伸びた。伸長幅は、雨天・曇天時よりも晴天時の方が大きく、雨天・曇天時

は1日におよそ1~2 cm、晴天時はおよそ4~6 cmであった。3月14日頃に苞の上部が開き始め、17日には苞の上部から白色~クリーム色の付属体が出現した(写真2、3)。この時の全高は約229 cm、仏炎苞の長さは約76 cm、苞の太さは最も太いところで約13 cm、花梗の太さは約9 cmだった。以降、花梗、苞ともに太さはほとんど変化しなかった。

東京大学大学院理学系研究科附属植物園本園(小石川植物園)(東京都)では、2003年9月と2007年9月にアモルフォファルス・ギガスが開花しており、その付属体の色は赤紫色だった。また、付属体の太さは当園の株よりも細かった。そこで、当園の株が本当にアモルフォファルス・ギガスなのか、別種なのか疑問が湧いた。花梗



写真2 3月18日の様子



写真3 付属体の出現(3月18日)

が人の背丈を超える高さになるコンニャクはギガスを含めて数種しかないが、交雑種の可能性もあるため、正確な同定には花の観察が必要であった。このため、「アモルフォファルス・ギガス」という名前ではなく、「謎の巨大コンニャク」ということでマスコミや入園者等に情報提供することにした。結果的に、この呼称は多くの入園者の興味を引いた。

3月22日には、仏炎苞の基部が開いてきた。この時の全高は約265 cm、仏炎苞の長さは約107 cmだった（写真4）。



写真4 3月22日の様子
(全高約265 cm、仏炎苞約107 cm)

3月25日には、全高は約277 cm、仏炎苞の長さは約119 cmになった（写真5）。3月28日には、仏炎苞の上部が開き始めた。全高は約286 cm、仏炎苞の長さは約128 cmだった（写真6）。そして3月29日に開花した（写真7、8）。開花時の全高は約288 cm、仏炎苞の長さは約130 cmだった。開花した朝、花の近くに寄ると腐敗臭がした。脚立に登って仏炎苞の内部を観察すると、腐敗臭が非常に強かった。付属体の下部には雄花群（写真9、黄色部分）と雌花群（写真9、黄色部分より下）が確認できた。

サトイモ科の研究者であり、2003年、2007年のギガス開花時の小石川植物園園長でもあった

東京大学大学院理学系研究科名誉教授の邑田仁先生に開花した巨大コンニャクの写真を送り同定を依頼したところ、アモルフォファルス・ギガスではなく、アモルフォファルス・デカス・シルヴァエであろうとの回答があった。ギガスとデカス・シルヴァエはともに人の背丈以上に花梗が伸び、ほぼ同じ地域に自生している種であるため、現地ではギガスとデカス・シルヴァエがあまり区別されずに採種され、国内に種子が輸入された可能性が考えられる。デカス・シルヴァエは国内の植物園では数園が株を保有していると思われるが、開花は当園が初である。



写真5 3月25日の様子
(全高約277 cm、仏炎苞約119 cm)



写真6 3月28日の様子
(全高約286 cm、仏炎苞約128 cm)



写真7 3月29日開花時の様子（全景）
（全高約288cm、仏炎苞約130cm）



写真8 3月29日開花時の様子（上部拡大）

付属体や仏炎苞に滴る分泌液があったので、採取して調べると非常に強い腐敗臭がした（写真10）。4月5日には仏炎苞はしぼみ、付属体が折れた（写真11）。その後、花梗が折れ、地上部

が枯れた。

2022年1月時点では、葉が出ている状態で、今後肥培管理・鉢増しをして球茎をさらに大きくし、数年後には今回よりも背が高く大きな花を開花させたい。

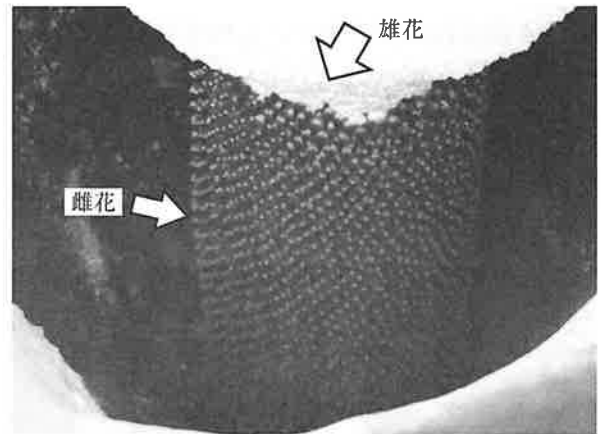


写真9 付属体の下部（雄花と雌花）

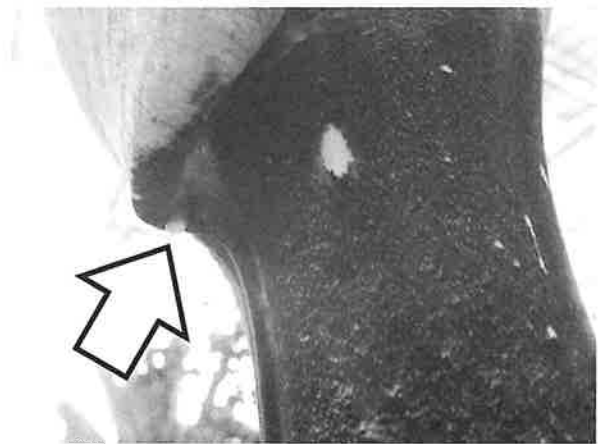


写真10 付属体から滴る分泌液



写真11 折れた付属体（4月5日）

最後に、アモルフォファルス・デカス・シルヴァエの同定等に関してご助言をいただいた東京大学大学院理学系研究科 名誉教授の邑田仁先生に深く感謝申し上げます。